りしかば、今年は國許へは引れまじ邸中に殘し置れべしとありしほどに、今日明日は立れなんと云頃に、附のもの馬を飼とて、今年は殘るげなと人に云如くいひける、馬は頭をうなだれて、ぬかを食はず、餘りにあはれげに見へければ、人々驚きあへる折ふし、朝臣側近く來り、これを見て、馬の煩ふにや、いかにかくはあると問はれしに、右のよしを申ければ、かねて秘藏の事なれば、大に感じつゝ、いたはりてこそのこさんといひし、此上はなにとか引ざらんとて、馬の頭を撫て、自身も感涙をながして、かならず連行んと有ければ、人の聞入如くにて、元の如く勢ひ出ける程に、頓て引具して、國に趣て後、名馬なれば、種を殘す爲なりとて、牧へはなちおかれしかば、頓て駒を生しぬ、彼國狼多く出て、駒を取故、常に駒をば中に寐させて、親ども多く集り、外を圍ひ丸く居るなるが、やゝもすれば駒をとらるゝなるに、彼馬は、狼の出ると見ると、その廻りを走りつゞけて、折ふしは狼を蹴殺しぬる事多かりけり、一年を經て、勝れたる逸物なれば、今も乘られなんやとて、馬場にて掛に、少も前にかはらず有たりけるゆへ、いよ〳〵大切にして飼置れしとぞ、あやしきやうなれど、質直の士の語りしゆへ記し置ぬ、かつ犬馬人近きものなれば、稀にさもありなんか、陸士衡が故郷へ書を傳へし犬などもあるなればなり、

〔閑田耕筆〕三〕過し癸丑歳〇寛政五年七月二十二日、攝津高槻の近邑農家の男兒、纔六歳にて、馬を追て城下に出て歸るさ、道なる川に水出て渡るべからず、いかにせんと見をりける間、暮にせまりて雨いよ〳〵はげしければ、人かげもなし、童大に叫び歎きしかば、馬やがて此子を喰へてやすやす川を渡り、むかひにして地にはなつといへども、闇夜に雨篠をつくがごとくなれば、行べき方を玄らざりしに、馬また先にたちて歩みければ、童も泣々綱を取て、つひに故なく我やどにかへりたり、むかへに人を出したれども、馬は間道を歸りたれば逢ざりし、さるにことなく歸りて、玄か玄かのよしを語りしかば、家こぞりて限なくよろこび、先馬をもてなし、明る日餅を搗て其邊